での人格発達や全体的発達」が導かれにくく、故に発達の階層を越えていくための生後第1・第2の発達の原動力が導かれにくい。本研究では、人格発達の基礎である「第2者形成」・「第2者との第3者の共有」を問題としてそれを導くための発達援助的方法として音楽療法の事例をとりあげたが、対象児にとってこの活動が初年度の半年間のみの観察であるので、「発達的変化」として確実な結果が得られたとはいえないが、毎回の活動での表出する姿から、少なくとも生活場面や児の全体的発達状況を考えあわせた時に音楽療法的活動が有用ではないかと考えられた。音楽が「快の情動」に関与し、人との関係を結ぶ際のよい媒体となりえる可能性は示唆された。しかし発達障害等の個々人により差のある、特別なニーズを抱えるような対象者には、本人が受容できる感覚にあわせた音楽・雰囲気の提供に配慮が必要であり、これは「音楽」という、感覚や情動に関与する媒体であるがゆえであるといえる。本研究のように集団で行うタイプの音楽療法では、調査から集団で行うことの発達的援助としての有用性と、個々人のニーズにあわせた援助の両立に課題が見出せた。

子ども観の捉え直しが学校カウンセリングの発展に与える影響

斉藤　満

目　次

1　目的と問題
1―1　目的およびその背景
1―2　先行研究の概観
1―3　先行研究の問題点と本研究の位置付け
1―3―1　先行研究の問題点
1―3―2　本研究の位置付け
1―4　本研究の基礎となる理論的枠組みと用語の定義
1―4―1　本研究の基礎となる理論的枠組み
1―4―2　用語の定義
2　方法
2―1　対象と調査時期
2―2　調査方法
2―8　調査方法の妥当性
2―4　調査結果の整理方法
3　結果
3―1　各調査項目の結果
3―2　調査項目の分析
4　考察
4―1　項目別の考察
4―2　調査項目の分析結果に関する考察

4—3　調査内容と関連する考察
4—4　総合的考察
5　結論と今後の課題
5—1　結論
5—2　今後の課題

目的と問題

本研究の目的は、教師の子ども認知を調査し、その結果を踏まえて、教師の子ども観について考察することで、子どもに対する心理臨床場面、とりわけ、学校カウンセリングに役立てる術を検討することである。

上記の目的設定の背景は下記のとおりである。近年、子どもの心理臨床がますます重要視されてきている。それと同時に、我々の社会においては主要な教育の場であると考えられてきた学校という場所においても、様々な問題が生じて、今や教育の機能が著しく低下していっているようにみえる。中でも、現在小学校を中心に問題になっており、90年代後半からマスコミでも大きく報道された「学級崩壊」という新現象は、日本の教育界に衝撃を与えた。この「学級崩壊」に巻き込まれた教育関係者たちは口をそろえて、子どもたちが理解できなくなった、と訴えた。この「学級崩壊」に関しての全国的な実態は数年前まで不明なままであったが、一九九九年二月に文部省（現・文部科学省）がやっと重い腰を上げ、初の本格的な実態調査に乗り出した。そして二〇〇〇年三月に当時の文部省に委嘱されて崩壊を調査した学級経営研究会が最終報告をまとめたのである。そこで、以前、筆者はこの学級経営研究会（二〇〇〇）の報告をもとに、子どもが理解できなくなった原因を明らかにするために、「学級崩壊」などを引き起こす現代の子どもについて考えた。その時、問題になったのは、我々の多くは、あまりにも子どもたちを操作主義的な観念でのみ捉えているのではないか、ということである。そして、そこで結論づけられたのは、今日、我々に求められているのは、子ども観を捉え直すことではないだろうか、ということであった。このように「子ども観の捉え直し」は、「子どもの心理臨床においては、深い洞察に裏打ちされた柔軟な対応が求められている」[①]。今日では、重要なテーマになってくると考えられる。また、浦野（二〇〇一）はおよそ以下のような見解を示している。学級の荒れ（学級崩壊）という現象は、子どもと教師の関係性の中に潜む食い違いやズレに気付かないことに端を発し、その食い違いやズレを地道に修正しようとする努力により、改善は可能だと考えられる、という。そして、学級の荒れの問題に対処するにあたっては、教師と子どもの人間関係に注目し、悪循環を起こしている両者間のコミュニケーションを再構築することが重要な意味を持つ、と考えている。そして、「その際に注目すべきことは、子どもから見て教師がどのように見えるかという子どもの教師認知と、教師から見て子どもがどう見えるかという教師の子ども認知である」[②]と述べている。そこで、本研究では今一度、子ども観について考察し、心理臨床の

立場から何をすべきかを検討するために、教師の子ども認知を調査することにした。

方法

教師が子どもをどのような視点で捉えているかを調査するために、教師用RCRT・新版（近藤、一九九五）を実施した。

(1)調査の対象者

大阪府内の市立中学校で学級担任をしている教師10名（男性4名、女性6名）。

(2)調査の時期と場所

二〇〇三年一〇月から二〇〇三年一二月にかけて、調査対象者の勤務する中学校において調査した。

結果と考察

教師用RCRTより得られた結果を、越（二〇〇二）の「児童・生徒認知次元の分類」[3]を参考に、調査対象者全員の認知次元の意味内容を8つのカテゴリーに分類して考察を進めた。8つのカテゴリーに分類される認知次元は、①能力がどうであるか、②物事に対する姿勢や意欲はどうであるか、③行動統制が教師にとってとりやすいか、あるいは自立的に行動統制がとれているかどうか、④人間関係に配慮した行動がとれるかどうか、⑤基本的生活習慣が身についているかどうか、⑥性格としての他者への関わり方はどうであるか、⑦明るい性格であるかどうか、⑧自己を表出し表現できるかどうかである。その結果、本研究の調査対象となった中学校教師からは、越（二〇〇二）の研究の中学校教師とは異なる認知次元の特徴が示された。したがって、ごく一部の教師に教師用RCRTを実施しただけでは、認知次元をいくつかのカテゴリーに分けて検討することはできても、認知次元のカテゴリー別の使用頻度から判断して、教師を一般化して捉えるべきではないことが示唆された。しかしながら、近藤（一九九五）が指摘する、教師の認知次元が〝こうあってほしい〟姿と〝こうあってほしくない〟姿とを両極とする尺度になっているという特徴は、本研究における調査結果からも読み取ることができた。また、近藤（一九九五）が述べる、子どもを捉える教師の視点の背後にあって、それを規定している要因も、概ね本研究の調査結果にも当てはまるものであった。これらのことから、認知次元のカテゴリー別の使用頻度だけで、細かい特徴を一般化することはできないが、大まかな教師特有の子ども認知、または子ども観が存在していることが分かった。そして、このような知見をもとに、子どもの心理臨床に携わる者は、教師以上に柔軟な子ども観を持つことが求められていることを指摘し、教師が自らの子ども観と向き合って、自己を振り返ることで、子ども観を捉え直せた結果、子どもの問題も解消したという近藤（一九九四、一九九五）のモデルを参考に教師への介入方法の検討を進めた。そこで本研究が注目したのが、山田（一九八四）の教師用RCRTを用いたフォーカシング

に関する研究報告であった。残念ながらこの類いの研究報告を山田（一九八四）の他に発見することはできなかったが、本研究では、教師を支援することで、子どもの問題を解消していくような方法として、フォーカシングという技法に注目した。

本研究をとおして、学校カウンセリングをはじめとして、子どもの心理臨床に携わる場合には、子どもを柔軟な姿勢で捉えることがいかに重要であるかということが確認されたのではないだろうか。教師の子ども観を知ることも、自らの子ども観を捉え直すためのひとつのきっかけになると十分に考えられる。学校カウンセリングをさらに発展させていくためには、自らの子ども観を今一度捉え直してみることも意味のあることではないかと思われる。

今後の課題

本研究で用いた教師用RCRTは、実際に試してみて、様々な角度から教師の子ども認知を検証することができる方法であることは確認できた。しかしながら、この調査法は、多忙である被験者の教師にとっては、「量的な点でも質的な点でも大きな負担をかける調査④」であり、作業にかなりの時間を必要とするものであることも分かった。本研究における調査対象者からは、2時間近くかかったという声も聞いた。こうした時間的な負担も関係して、調査対象校に依頼してから回答用紙を回収するまでにかなりの時間を費やしてしまい、その分、調査結果を分析・考察する時間が余りにも少なくなってしまったことも課題が多く残された原因になってしまった。

上記のような調査法の性質上、数多くの教師に依頼してデータを得ることが困難だったため、どうしても考察の際に、先行研究の結果に頼らざるをえなかったことも、反省すべき点であろう。豊富なデータを蓄えて、自分の調査結果から、独自の理論を展開できるような研究をしていくことが大きな今後の課題として残された。

註

① 村瀬嘉代子（二〇〇〇）「子どもの心理臨床の今日的課題」安香宏・村瀬孝雄・東山紘久（編）『臨床心理学大系第20巻　子どもの心理臨床』金子書房 p.3

② 浦野裕司（二〇〇一）「学級の荒れへの支援の在り方に関する事例研究―TTによる指導体制とコンサルテーションによる教師と子どものこじれた関係の改善―」『教育心理学研究第49巻第1号』p.112

③ 越良子（二〇〇二）「児童・生徒認知に関する教師の自己把握」『上越教育大学研究紀要　第21巻第2号』p.622

④ 近藤邦夫（一九九五）『子どもと教師のもつれ』岩波書店 p.31